

針広混交林を目指して

常呂川森林ふれあい推進センター
自然再生指導官 岩本 智行

課題として取り上げた背景・目的

自然再生モデル事業とは、生物多様性の確保及び自然と共生する社会の実現を目指して「オホーツクの森」で郷土樹種を中心に針広混交林を造る事業で、平成16年からスタートし約10年が経過しました。

この間、自然再生モデル林内で行われたモニタリング調査について、平成26年に実施した結果と過去に実施した結果を比較し、針広混交林に誘導するための今後の自然再生モデル林の手法を考察します。

研究の内容・成果

自然再生モデル林内では、平成17年の初回調査以来、平成19年、21年、26年にモニタリング調査を行いました。

今回は、その調査内容のうち林分構造調査に着目して、この間、どのような変化があったのか比較してみました。

その中で、胸高直径10cm未満の小径木広葉樹の発生率が、ストロブマツ人工林はトドマツ・エゾマツ人工林に比べ、約1.7倍程度あることがわかりました。

以上の結果からストロブマツ人工林は、間伐を繰り返すことで針広混交林への誘導が可能ではないかと考えます。

一方、トドマツ・エゾマツ人工林については、何らかの方法を考えないと針広混交林への誘導は難しいと考えます。



更新良好なストロブマツ林



更新不良なトドマツ・エゾマツ林

今後の手法

ストロブマツ人工林の間伐後の林分状況を調べる調査と同時に、ストロブマツ人工林とトドマツ・エゾマツ人工林との広葉樹発生率の違いを科学的に解明するためのモニタリング調査の見直しを行うこと、及びトドマツ・エゾマツ人工林で広葉樹を更新させるための補助作業を検討することやトドマツ・エゾマツ人工林の間伐方法を工夫することなどが必要と考えます。

今後の展開

そのためにも、いろいろな手法を行ないながらの継続的なモニタリング調査の実施や効果的な調査方法の指導・助言をしてくれる大学など学術機関との連携が必要と考えています。